

有機栽培での加工仕向け用ユズの 安定多収技術開発への取り組み



写真1 有機栽培ユズ園での現地調査



写真2 有機質肥料の施用効果の比較
（ポット試験）

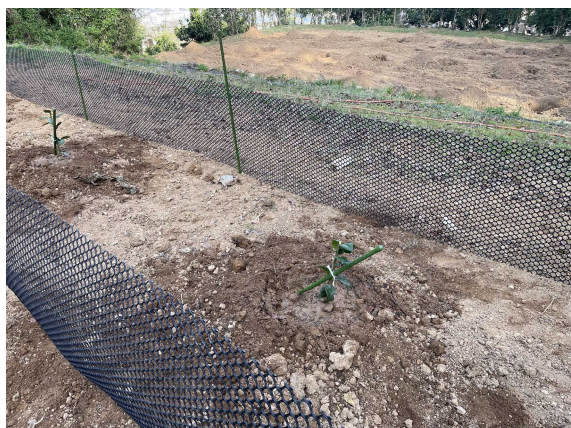


写真3 植え付け時から有機質肥料を
違って管理を行い、生育を比較

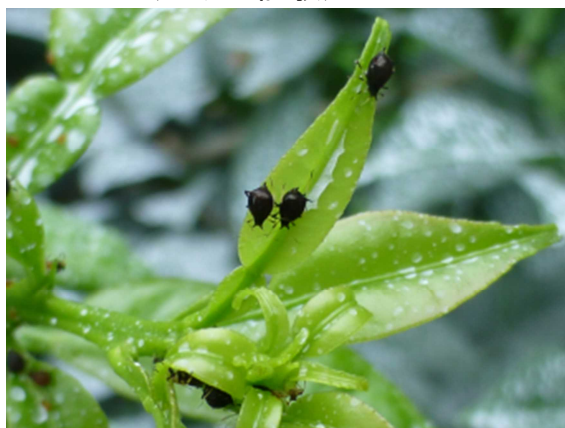


写真4 強毒CTVを媒介する
ミカンクロアブラムシ

「みどりの食料システム戦略」では、2050年までに全国の有機農業の取組面積割合を全体の25%に拡大することを目標としており、高知県ではユズを有機栽培の戦略的品目として位置づけています。

現在、高知県におけるユズの有機栽培は、馬路村、安田町、津野町、梶原町および四万十町等の計120ha(令和5年度、JA高知県調べ)で取り組まれています。しかし、有機栽培では使用できる農薬や肥料等に制限があり、有機栽培での収量性が明らかになっていません。また、慣行栽培と比較して樹体生育が劣るため、収量が少ない事例がみられます。さらに、ユズはカンキツトリステザウイルス

(以下、CTV)に罹病性ですが、有機栽培では強毒CTVを媒介するアブラムシの防除ができず、強毒CTVによる収量低下もみられています。

そこで果樹試験場では、本年度より3年間の計画で、現地調査によって有機栽培での加工仕向け用ユズの収量性を明らかにし(写真1)、有機質肥料を活用した安定多収技術の開発に取り組みます(写真2)。さらに、有機栽培の未収益期間における適正管理技術の開発(写真3)や、有機栽培に適する系統の育成にも取り組む予定です(写真4)。

(果樹試験場 谷本 佑 088-844-1120)